保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.1

保育を見つめ直す時間

新倉理沙

新シリーズ「保育をつなぐ～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～」では、子ども・保育者・保護者がつながり、共に生き、共に創り、共に育つことを目指し、本園をめぐる多様なつながりを視点に発信する中で、保育を見つめ直していきます。地域とのつながりを深めること、社会に開かれた教育課程編成を目指すこと等が、本園にとっても大きな課題となっています。お茶の水女子大学内には、附属幼稚園、学内者向け託児施設であるいずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園という三つの乳幼児施設があり、この3施設がかかわる中で、3歳児入園前の子どもたちの育ちについての理解を深めたいと考えるようになりました。

そこでシリーズ第1回は、本園に着任し3歳児学級を担任した若手保育者が、こども園で2歳児学級を担任した経験とつなげて、新たに子どもと出会い、向きあってきた葛藤を綴ります。

＊

新倉理沙（にいくら りさ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

私は、大学を卒業してから前年度まで勤めていたこども園を離れ、今年度から幼稚園へ移りました。新しい環境に飛び込んだ昨年の4月、同じく春から幼稚園へやって来た子どもたちと出会い、年少組の担任になりました。これまで0歳児や2歳児の担任をしてきた私にとっては、3歳児の担任をするのは初めてのことで、さらには一人で担任を持つということも初めての経験でした。それでも、大学で学んでいた頃に幼児とかかわることが多かったことを思い出すと、「戻る」という感覚があり、どこかわくわくする気持ちも感じていました。

ところが、実際に幼稚園の生活が始まってみると、いつの間にか慣れ親しんだこども園との違いを感じ、戸惑うことばかりのスタートでした。特に難しかったのは、子どもたちが園で過ごす時間の短さです。こども園では、長いときには10時間以上、子どもたちが毎日たっぷりの時間を園で過ごし、まるで第二の家庭のように自分を表していました。それに比べると、幼稚園での生活は、とても短く感じられました。日を重ねてもなかなか居場所や遊びが見つからず、子どもたちの思いがくすぶっているような姿に、私も焦る思いがありました。

しかし、そのような心配に駆られる中、一人ひとりの小さな変化や育ちに気づくたびに、はっとさせられるのでした。それは例えば、身体を使ってどうにかこうにか気持ちを表していた子が、「〜したいの」と言葉で伝えようとしてみるひと言であったり、教師にぴったりくっついて過ごしていた子が、「今日は○○を作る！」と思いをもって動き始める一歩であったりしました。そんな姿に触れながら、落ち着いて子どもたちの姿を見つめ直すと、ふうっと肩の力が抜けます。「大丈夫、しっかり育っているよ」と子どもたちに伝えながら、

自分も子どもたちのたくましさに励まされるような日々の繰り返しでした。

子どもたちが少しずつ幼稚園に慣れてくると、幼稚園全体へ居場所を広げて遊ぶようになってきました。すると今度は、子どもたち全員の心の動きを追うことの難しさにぶつかりました。自由にのびのびと遊ぶことはとても心地よいけれど、教師の力が試されるということを実感します。みんなの心の声に気づけているかな？　応えられているかしら……と反省ばかりの日々でした。

そのような中で、園の先生たちがみんなで子どもたちを見守ってくださる雰囲気が、とてもうれしくありがたいものでした。他の先生が出会った子どもたちをあちらこちらで受けとめてくださり、保育後に「あの子がね、この子がね」と語りあう何気ない時間に、子どもだけでなく私まで温かい気持ちをもらって、安心してまた翌日の保育に向かえました。

短い保育時間は難しさもあるけれど、その分しっかり日々を振り返ろう、そしてまた明日の子どもたちに向きあおう、という気持ちで過ごしてきました。この一年間にあらためて感じたのは、子どもたちの思いの表し方がさまざまであることでした。その違いが面白く、表現の裏にあるそれぞれの気持ちを大切に受けとめていきたいと過ごしてきました。「何を感じているのかな？」「どうしてこうしたんだろう？」と考えを巡らせ、一人ひとりの気持ちに寄り添うことはとても難しくもあり、けれど面白いと実感する日々でした。

年少の春。入園したばかりの子どもたちにとって、幼稚園は刺激たっぷりの世界でした。その驚きや戸惑いの表し方も十人十色で、「大変！　大事件！　ちょっと来て！」と、見た

こと聞いたことを必死に教師に伝える人がいれば、自分のカバン、作ったもの、砂場のバケツなど、お気に入りのものを両手いっぱいに持つことで安心する人もいました。

そのように、少しずつ幼稚園の生活に慣れてきた4月下旬から、A男が友達を押す、たたく姿が増えていきました。周りのことが目にも耳にもとてもよく入ってしまうA男。その刺激がA男にとっては大き過ぎて、持て余してしまい、不安や恐怖を感じて余裕をなくしているようでした。「大丈夫、みんないい人たちだよ」というメッセージを込めながら、根気強くかかわっていきました。教師を拠り所にしながら心にぴったりはまる遊びを見つけていくことで、時間をかけて少しずつですが、穏やかな表情で友達に働きかける姿も出てきました。ところが友達のほうはA男が近づくと身構えてしまうことがあり、その空気を敏感に感じとったA男が、拒絶された焦りからまた手を出してしまう……。「いけないのはわかっているけれど、どうしようもないんだ」というもどかしさがA男から伝わってくるような、葛藤の日々が続きました。

そんな6月初めのある日、A男がB子のバンダナに興味をもって取ってしまい、B子が泣きだしました。私は話を聞き、他のクラスへ同じバンダナを借りに行くことにしました。近くで心配そうに見ていた友達もついて来ます。「これ、借りたいの」と口々に話してくれる友達。さっき泣いていたB子も「色が違うんじゃない?」と一緒になって助けてくれていました。訪ねた先の年長の子どもたちも、「どうしたの?」と優しく話を聞いて答えてくれます。そうしてみんなに見守られながら二つのクラスを回ってやっと借りることができ、二人で同じ色のバンダナを着け、並んでままごとを始めました。かかわり合いはありませんでしたが、A男がコンロを使おうとす

るとB子がすっと譲って待ってあげる、A男も隣にそんなB子の存在を感じて黙々と遊び続ける。とても穏やかな空気に包まれた時間でした。A男は「楽しかった！　明日もする！」と教師に満面の笑みを向けてにこにこと降園していきました。

年少の一年間、教師を拠り所にして安心して過ごしていけるように、好きな遊びややってみたいことを見つけてたくさん楽しめるようにと何よりもまず願う気持ちがある反面、やはり一緒に過ごしている友達の存在が大きいことも実感します。そして、いろいろな人がいるということがとても大切なのだと感じる日々でした。A男の、気持ちが張り詰めていた中で思いがけず優しくされて、ふっと肩の力が抜けた経験。周りの子どもたちにとっても、A男の気持ちに寄り添うことができたという安堵のようなものがあったように感じました。いやいやと言っている人、泣いている人、怒っている人など、幼稚園の生活ではいろいろな人に出会います。「どうしてだろうね」「どうしようかな」とつぶやく人がおり、言葉にしなくても考えているような姿もあり、一人ひとりの心が動いていることが伝わってきました。

好きな遊びや過ごすペースも人それぞれでした。甘えん坊がいればお世話好きもいて、その触れ合いが安心や自信になっていく人もいました。のびのび身体を動かすことが好きな人、泥んこになって感触を味わうことが好きな人、じっくりと製作をすることが好きな人、なりきって遊ぶことが好きな人。

そうしてそれぞれに自分の好きな過ごし方をしながら、友達の様子もよく感じていました。「○○くん、お砂場にいたよ」「それは○○ちゃんが作ってた！」と、こちらが驚か

されるほどにお互いの存在によく目を向けて、耳を傾けながら過ごしている姿を、すてきだと感じました。思ったようにいかないときは、一緒に心を休める時間も大切にしたいと支えながら、一人ひとりがそれぞれの道筋で育っていく様子を見つめてきました。

いろいろな人と過ごすことの刺激は戸惑いも生むけれど、うれしい気持ちや楽しい気持ち、優しさやたくましさもたくさん育んでいきます。そして、子どもたちがだんだんと優しい表情を交わしあっていく姿に、お互いの存在を受け入れあっている温かさを感じ、とてもうれしく思うのでした。

幼稚園で、子どもと過ごすことをあらためて面白いと感じた一年間でした。前年度まで過ごしていたこども園で感じてきたことは、乳児も幼児も、何歳の子どもであっても、一人ひとりを大切に保育をしたいということでした。その思いとともに幼稚園へ移り、一人ひとりを見つめる面白さをじっくり確かめるような日々になりました。子どもたちをありのままに受けとめて大切にしたい、それぞれの気持ちに寄り添っていきたいという思いをもち続けて、またこれからも、保育をしていきたいと思っています。